

第1章 文体論の所在

1. 文体という対象

日本語とはどのような言語なのか。その実態を明らかにする際には、さまざまなものが対象となり得るだろう。日本語の文にはどのようなタイプがあるのか、どのような状況下で当該語が使用可能になる（もしくは使用不可能になる）のか、ある語がどのような過程を経て現在の意味を獲得したのか、地域や年代などによって使用する言葉にどのような違いがあるのかなど、日々さまざまな関心に基づいて日本語の実態というものが明らかにされつつある。

そうした関心の中には、日本語の文章にはどのような種類があるのかという点も含まれるだろう。文章の種類と一言で言っても、さまざまな観点があるため、すぐさまこのように分けられると述べることは難しいが、たとえば、次の(1)~(3)の文章を読んだときに、どのような違いが見えてくるだろうか。

(1)ボーイは、何回も、聞いてから、「よく似ています」と、十津川に、いった。これだけでは、何ともいえないが、十津川は、同一人に違いないと、確信した。そうなってくると、男が、電話を掛けて来た真意が、問題である。男のいったことを、そのまま受け取れば、警察が、山本を犯人と考えているのは、間違いだということになる。しかし、亀井のいうように、山本が、男を使って、警察の捜査を混乱させようとしているのかも知れない。山本自身も、自分が一番疑われているのは、知っている筈だからである。このどちらかなのだ。「まさかー」十津川が、呟やくと、亀井が、「まさか、何です?」「まさか、近藤弁護士が、犯人ということは、ないだろうと、思っ
てね」「彼は、遺産の受取人じゃありません」「しかし、相続人の一人と、組んでいるかも知れないよ」「例えば、土橋かおりとですか?」「ああ」「どうも、私には、考えられませんがねえ」と、亀井は、首をかしげた。犯人のモニタージュは、秋田県警にも、送られた。秋田市内で、福沢みどりは、何者かに、車を、ぶつけられた。その犯人と、同一人かも知れなかったからである。 (『日本海殺人ルート』西村京太郎 2002、徳間書店、LBq9_00258、71410)

(2)北朝鮮亡命者支援中国の規制強化に抗議在ソウル大使館で【ソウル二十五日 共同】

北朝鮮から韓国への亡命者や、支援する非政府組織（NGO）メンバーが二十五日、ソウルの中国大使館周辺で、中国が最近、北朝鮮からの越境者の潜伏生活や韓国亡命を支援するNGO活動の取り締まりを強化する動きを見せていることに対し、抗議行動を行った。北京で十四日に起きた北朝鮮住民二十五人のスペイン大使館への駆け込み事件を支援したドイツ人医師、ノルベルト・フォラツェン氏を含め百人近くが参加。機動隊員らと小競り合いを繰り返した。二十五日、ソウルの中国大使館前で、北朝鮮からの越境者取り締まり強化を進める中国に対し、強く抗議するドイツ人医師のフォラツェン氏（中央）ら＝AFP・時事北朝鮮あす最高人民会議対米韓関係と予算配分焦点【ソウル二十五日 城内康伸】北朝鮮は二十七日に、国会に当たる最高人民会議第十期第五回会議を開く。予算案や新たな法令の審議が主要議題とみられるが、悪化する米朝関係に対する態度表明や、韓国特使の訪朝に絡んだ韓国へのメッセージの有無が注目される。最高人民会議は近年、四月初めに開催されることが多かった。

（中日新聞 2002、PNzf_00007、40）

(3)本日で、T O K I Oは十四周年目でしたよねー！！おめでとうございますー！！早いっすねー。もう来年で十五周年目っすねえー。何かしらイベントやったり、アルバムとか出してくれない・・・のかなあ？あ・・・ユニバ時代のベストアルバムとか出してくれないんですかね？新曲・・・楽しみっすねえ～。新番組のテーマ曲になるんでしょうかねえ？十一月頃に発売なのでしょうか・・・？とりあえず・・・これからも頑張ってくださいーい！！！！実は十五日は嵐の9周年目の日だったのですが、祝えなかったの、ここでこっそり言っておきます。9周年、おめでとうございます！！（遅すぎ）つーかまた新曲・・・ニノの金曜ドラマの主題歌が・・・嵐・・・十一月5日発売・・・o r z ああ！！！！来年はT O K I Oが十五周年で、嵐は十周年なのかー！！！！なんかす

げえー！！！！本当はもっと書きたかったのですが、雷が鳴ってきたので、この辺にしておきます（滝汗）もう1つ更新しようと思ったのに・・・。あー・・・また後日、話しましょう。

（Yahoo！ブログ 2008、OY04_03603、10）

(1)は小説の一節で、登場人物間の会話を描いている。そのため、会話文が多く見られる。また地の文の中に、登場人物の動作と状況説明とが見られる。これに対して(2)は、冒頭表題に「北朝鮮亡命者支援中国の規制強化に抗議」とあるように、海外の情勢について説明されている。同じ書き言葉でありながら、両者は会話文の有無という点で内実を異にする。単にそれだけであれば、あまり大きな違いとは言えないのかもしれないが、新聞記事である(2)の方が、明らかに漢語名詞を多用している。さらにブログ記事の一部である(3)と比較すると、文章の違いがより明確に分かる。(1)(2)に見られず、(3)によく見られる要素としては、語末の長音、「・・・」「！」などの記号、「o r z」のようなスラングといった形式的な部分がまず該当しよう。また、(3)は非常に話し言葉寄りの言葉遣いと印象も受ける。

こうした表現の差異は、上記(1)～(3)の個別の文章の問題ではなく、ある特定の文章間に共通した問題とされることがある。ここでの場合、小説、新聞、ブログ記事というまとまりによる言葉の違いという側面を多分に含む。より具体的に述べるならば、会話文が多いというのは、小説だけではないだろうし、小説の中にも会話文が少ないものもあるだろうが、他の新聞やブログ記事といった場合の文章と比較したときの“小説”というジャンルに見られる文章上の特徴として把握できるだろう。また、文字数の制約の強い新聞記事であれば、より短く、内容を端的に伝えられるように、漢語が多用されることは想像に難くない。これらいずれの場合も、同じ日本語の文章でありながら何らかの要素によって異なる特徴が見出される。このような文章上の特徴のバリエーションというものは日本語の一部であり、そうした点に関する実態を明らかにすることを目的としたものを「文体論」、またそこで対象となる一定の特徴に基づく文章のまとまりを「文体」と呼ぶ。

概ね「文体」とはこのように説明できるが、おそらく一般には、「夏目漱石